

エダマメ (露地) (黒ボク土)

〔土壤肥料〕

本作目は、栄養生長から生殖生長に転換する型である。窒素をはじめ養分吸収パターンは山型を示し、収穫後の土壌の残存養分は比較的安く制御できる。とくに、窒素については、開花期以後の吸収は根粒による供給が中心となる。

生育期間が比較的短いため、初期生育の良否が直接収量に影響する。そのため、全量基肥により初期生育を確保する。

〔病害虫・雑草防除〕

黒根腐病等の土壌病害対策として連作を避け、排水を良好に保つ。過度の密植を避け、通風を良好にする。育苗する場合は環境に留意し、病害虫の発生を防ぎ、本圃への病害虫の持ち込みを避ける。本圃では適期防除を行い、化学農薬の使用削減に努める。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
有機質資材施用技術	<p>土壌診断に基づいた低成分含量堆肥(稲わら堆肥及び落葉堆肥等で、窒素、カリ含量が1%以下の完熟したもの)の施用を基本とする。</p> <p>肥料成分含量の高い畜産系堆肥の施用にあたっては長期的な視点にたった投入量管理を行う。</p> <p>緑肥作物を利用する。</p>	<p>堆肥 1~2t/10a</p>
化学肥料低減技術	<p>全量基肥とし、局所施肥(条施肥など)を基本とする。</p> <p>有機質肥料による施肥を行う。</p>	<p>成分量で施肥基準以下</p> <p>有機質肥料併用の場合には化学肥料低減率20~50%</p>
化学農薬低減技術	<p>B T剤をローテーション散布に位置づける。 (対象：ハスモンヨトウ)</p> <p>対抗植物(クロタリヤ)を利用する。 (対象：ダイズシストセンチュウ)</p> <p>光反射マルチを利用する。 (対象：アブラムシ類、雑草など)</p> <p>防虫ネットで被覆を行う。 (対象：アブラムシ類、カメムシ類、シロイチモジマダラメイガなど)</p> <p>マルチ栽培を行う。 (対象：雑草など)</p>	<p>慣行使用回数の 20%減</p>
その他の留意事項	<p>開花期、着莢期に少量の窒素を追肥すると、増収、色沢が良好になるなどの効果がある。</p> <p>残存養分の多い圃場では、堆肥を通常量施用することで、無肥料栽培が可能な場合も多い。</p> <p>カリの吸収量が多いため多肥傾向にあるが、拮抗作用による苦土欠乏に留意する。</p> <p>水田転作など灰色低地土で栽培する場合には、作土深の確保などを図るとともに、優良有機物資材の施用を基本とし、溶脱防止に留意したきめ細かな施肥法をとる必要がある。</p> <p>盛土などが行われている圃場では、その客入土壌の改良を行う。</p>	

エダマメ (施設) (黒ボク土)

〔土壤肥料〕

本作目は、栄養生長から生殖生長に転換する型である。窒素をはじめ養分吸収パターンは山型を示し、収穫後の土壤の残存成分は比較的安く制御できる。とくに、窒素については、開花期以後の吸収は根粒による供給が中心となる。しかし施設では残存養分の過剰な蓄積を回避する必要がある。生育期間が比較的短いため、初期生育の良否が直接収量に影響する。また、低温期に栽培する作型なので、初期の肥効はあまり良くない。そのため、全量基肥により初期生育を確保する。

〔病害虫・雑草防除〕

土壤病害対策として連作を避け、排水を良好に保つ。過度の密植を避け風通しを良好にする。育苗する場合は病害虫の発生に注意し、本圃への病害虫の持ち込みを避ける。適期防除を行い、化学農薬の使用削減に努める。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
有機質資材 施用技術	土壤診断に基づいた低成分含量堆肥(稲わら堆肥及び落葉堆肥等で、窒素、カリ含量が1%以下の完熟したもの)の施用を基本とする。 肥料成分含量の高い畜産系堆肥の施用にあたっては長期的な視点に立った投入量管理を行う。 緑肥作物を利用する。	堆肥 1～2t/10a
化学肥料 低減技術	局所施肥(条施肥など)を基本とする。 有機質肥料による施肥を行う。	成分量で慣行施肥量の20%減 有機質肥料併用の場合には化学肥料低減率20～50%
化学農薬 低減技術	B T剤をローテーション散布に位置づける (対象：ハスモンヨトウなど) 天敵農薬を利用する。(対象：ハダニ類など) 微生物農薬を利用する。 (対象：コナジラミ類、アブラムシ類) 対抗植物(クロタラリア)を利用する。 (対象：ダイズシストセンチュウ) 夏季に太陽熱土壤消毒を行う。 (対象：土壤病害虫、雑草など) 光反射マルチを利用する。 (対象：アブラムシ類、雑草など) 流動性被覆資材を利用する。 (対象：灰色かび病など) 近紫外線除去フィルムを利用する。 (対象：灰色かび病、アザミウマ類など) 開口部やサイドを防虫ネットで被覆する。 (対象：アブラムシ類、カメムシ類、鱗翅目害虫など) マルチ栽培を行う。(対象：雑草など)	慣行使用回数の20%減
その他の 留意事項	開花期、着莢期に少量の窒素を追肥すると、増収、色沢が良好になるなどの効果がある。 残存養分の多い圃場では、堆肥を通常量施用することで、無肥料栽培が可能な場合も多い。 カリの吸収量が多いため多肥傾向にあるが、拮抗作用による苦土欠乏に留意する。 水田転作など灰色低地土で栽培する場合には、作土深の確保などを図るとともに、優良有機物資材の施用を基本とし、溶脱防止に留意したきめ細かな施肥法をとる必要がある。 盛土などが行われている圃場では、その客入土壤の改良を行う。	